

学習院大学史料館第23回特別展

パラオ共和国とその周辺

—高松宮殿下からのおくりもの—



1970年代、渡航制限の解除や高度成長により
海外旅行は、人々にとって気軽なものとなつたが、
いまだミクロネシアは戦争の記憶と分かちがたく結びついており、
必ずしも一般的な観光地ではなかつた。

しかしながら昨今、若い人々にとってミクロネシアの国々は
マリンスポーツを楽しむ場所として、身近になつてゐる。
ここであらためて、ミクロネシアの国々と日本との関係の歴史、
日本人のこころのなかに植え付けられた南洋のイメージ、
そのイメージを媒介したものなどについて検証することに意味はあるであらう。

■表紙の説明

アバイ模型(当館収蔵)について

アバイ(A-bai)とはパラオ共和国で、かつては各集落ごとに建設されていた「青年男子集会所」のことである。現在パラオ共和国内でもアバイの遺存例が少なくなっているといわれ、模型も現存するものがほとんど見られない。

アバイは椰子葉葺切妻造りの屋根を持ち、木彫彩色絵で飾られた破風板のある長方形家屋であり、実物は全長10～20メートルの大きなものである。

パラオ諸島のアバイは木彫彩色絵(ストーリーボード)が特徴で、各集落特有の伝承や物語などが記載されている。

■本展の開催にあたり、パラオ政府観光局・太平洋諸島センターには
特別のご配慮をいただき、以下の方々にもご協力をいただきました。
ここに記して深く感謝の意を表します。

帝国書院
大阪府立国際児童文学館
学習院大学図書館
学習院院史資料室

浅輪幸夫 五十嵐温子
岡田茂弘 小西 晃
佐々木利和

■担当 藤實 久美子 I・II・III・IV 長佐古美奈子 V・VI

学習院大学史料館第23回特別展 パラオ共和国とその周辺—高松宮殿下からのおくりもの—
会期 2003年4月1日(火)～4月30日(水)
編集・発行 学習院大学史料館
発行年月 2003年3月

はじめに

学習院大学史料館では、旧制学習院の歴史地理標本室にあった資料の一部を収蔵している。資料のなかには、現在のミクロネシア共和国やパラオ共和国など、南洋の島々の景観や産物に関する写真や絵葉書、また島の生活や文化様式をあらわす石貨・木皿・男子集会所(アバイ)の模型などが含まれている。もちろん、これらは現在のように貿易や観光旅行によってもたらされたものではない。では南洋の島々の資料がなぜここにあるのだろうか。これらの資料が日本にもたらされたのは、20世紀初頭つまり第一次世界大戦のことである。当時、日本の委任統治領であった南洋の島々は、軍部にとっては軍事訓練の地であり、企業にとっては興業の地であり、民間人にとっては移住の地であった。多くの人が「南へ」と向かった。今回の特別展示では、まず現在のミクロネシアについてみたあと、「内南洋」と呼ばれたその地域と日本との関係を政治・経済の側面から考察する。また教材について考える前提として児童雑誌などに描かれた南洋のイメージに触れ、そして高松宮殿下からおくれられた資料をいくつか紹介したい。この展示から、かつてのミクロネシア地域と日本との関係を、国家、国策、子ども、教育など、多様な側面から考える手がかりにしていただければ幸いである。



■マーシャル諸島 カヌー模型(当館収蔵)

I 現在のミクロネシアーパラオ共和国を中心に一

ミクロネシアとは「小さな島々」という意味で、1831年にフランス人によって命名された。ミクロネシアはパラオ・マリアナ・カロリン・マーシャルの各諸島からなる。

これらの島々は東経130度から180度、赤道付近から北緯20度の範囲に位置し、東西約5,000km・南北約2,400kmを占めている。島の数はおよそ2,140である。しかし島々の陸地の総面積は3,400km²(日本の島根県程度)にすぎず、人が暮らしているのは100島ほどである。

パラオ諸島に人が住みはじめた時期については諸説があるが、通説では紀元前2000年ころとされる。

パラオ諸島では独自の生活文化が展開されたが、かれらの歴史はスペイン人の探検家マゼランによる「発見」、植民地の拡大に向かう欧米諸国による占領、第一次世界大戦後の日本による委任統治、第二次世界大戦後のアメリカによる信託統治と世界情勢に翻弄されて、生活様式も変容を余儀なくされることになった。

1965年ミクロネシア地域内で自治権を求める声などが強くなり、ミクロネシア議会が発足した。1978年パラオはミクロネシア議会より脱退、独自の憲法起草にとりかかった。1994年10月1日パラオ共和国は誕生した。

現在、パラオ共和国は民主主義国家としての成熟、一方で伝統的な文化の継承を目標に掲げている。



II 20世紀初頭の「内南洋」と日本

明治20年代から、日本では人口の増加と資源の不足から、海外進出を國是とした。南の島々へと向かう南進論と中国東北部へと向かう北進論とが、政治の場では対立を呈した。

大正期になると南進論は新たな展開をみせる。

1914年(大正3)8月、日本は日英同盟を理由にして第一次世界大戦に参戦し、10月に日本海軍は赤道以北のドイツ領を占領した。

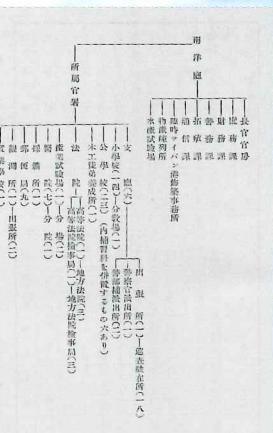
赤道以北のドイツ領とは、グアム島(アメリカ領)を除くミクロネシアの島々である。日本海軍はこれらの地を「南洋占領諸島」、略して「南洋諸島」と呼んだ。また「内南洋」とも称した。

1919年5月、第一次世界大戦は終結し、国際連盟が発足して、その委任をうけて、日本は引きつづき「内南洋」の統治にあたった。戦勝国は委任統治受任国の名目で領土を獲得したのである。1922年、日本はそれまでの軍制を解除し、南洋庁をパラオ諸島コロール島に設置した。1935年(昭和10)に日本は国際連盟を脱退するが、この体制はつづき、翌1936年からは国策としての南洋開発・移民政策が積極的に推進された。

第二次世界大戦後の1947年4月、国際連合安全保障理事会の決定で「内南洋」は太平洋信託統治領としてアメリカ統治のもとに置かれた。



■南洋庁舎(『HISTORY OF PALAU』1997年)



■南洋局組織図
(『昭和八年南洋群島要覧』)

III 「内南洋」の産物

南洋庁とその支庁では産業試験場・水産試験場を設置して調査・研究を進め、物産陳列所においては展示会を催して産業の育成と技術の向上に努めた。

無限の資源を包蔵すると宣伝された「内南洋」には多くの企業が進出した。1944年(昭和19)の段階で「内南洋」には約60の日本企業が本社を置いていたとされる。

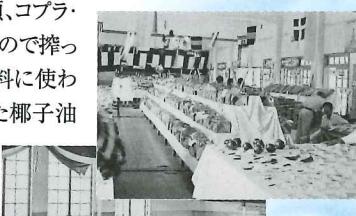
農業に関していえば南洋興発が先鞭となって投資開発を行った。南洋興発は半国策の製糖会社である。ジャングルはサトウキビ畑に変じた。このほかゴム園・椰子林・パイナップル畑などが拓かれた。

周囲の海域ではカツオ漁やマグロ漁がさかんに行われ、カツオ節・マグロ節といった製造品が移出された。とくに南洋産のカツオ節は東京市場の市価を左右するほどの生産量と質をほこった。高瀬貝漁も行われた。高瀬貝は貝ボタン・螺鈿の原料となるものである。真珠の養殖場では技術開発が試みられた。

現在、パラオ共和国の輸出品の上位を占めるのは、高瀬貝・魚類・コプラ・ココナッツ製品である。コプラは椰子の実の白い部分を乾燥させたもので搾って椰子油とする。ココナッツはコプラを糸状に切ったもので製菓材料に使われる。パラオ産のマグロは東京築地市場に出まわることがあり、また椰子油は製菓のほかマーガリン・石鹼などの原料に使われている。



■南洋特産物標本(当館収蔵)



■南興水産会社カツオの処理(同上)

IV 国内での「内南洋」のイメージ

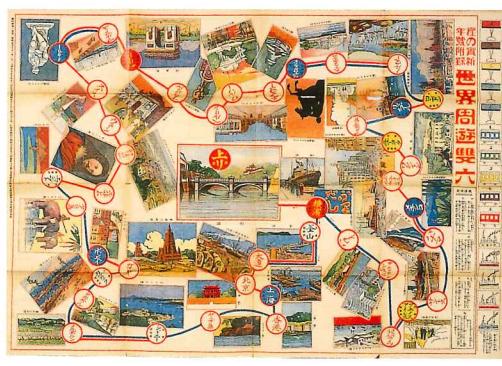
大正期、すでに「内南洋」は子どもの世界観のうちに含まれ、たとえば童謡雑誌『櫻の実』の附録「世界周遊双六」のなかにも「内南洋」は描かれている。

その後、子ども向けの絵本・雑誌で「内南洋」を題材にしたものが、さかんに世に出されるようになるのは、1931年(昭和6)の満州事変以降である。

日本の侵略政策を背景とした漫画としては島田啓三の漫画「冒険ダン吉」があり、流行歌としては石田一松作詞・作曲の「酋長の娘」があった。

「冒険ダン吉」は雑誌『少年俱楽部』に連載された。そのなかで島民は黒い肌をし、腰ミノだけをつけたいでたちで、一方ダン吉は白い肌で、王冠をかぶった指導者として描かれている。

島田が実際に「内南洋」に渡り、取材したかは不明であるが、おそらく彼が描いた世界は想像の产物であったろう。しかしながら彼が社会に放出した「内南洋」のイメージは、子どもの世界観あるいは南洋への「夢」に変換され、彼らのこころに深く刻まれた。



■『櫻の実』大正11年新年号附録 世界周遊雙六(当館収蔵)



■復刻版・冒険ダン吉(当館収蔵)

V 旧制学習院の南洋資料

—旧制学習院歴史地理標本室資料—

旧制学習院歴史地理標本室は、1900年頃から1949年(昭和24)にかけて、旧制学習院中・高等科に設置されていた施設で、歴史地理科教育・研究のためのさまざまな資料を収集・保管していた。おもな資料は標本、模型、地図、掛図、写真などである。標本室は当初、「第二教室棟」に設置されていたが、1923年(大正12)の関東大震災で焼失してからは「西1号館」3階に移った。

この資料群は、購入されたものをはじめ、当時学習院と同じ官内省所管の機関(帝室博物館など)から移管された資料、学習院関係者(皇族、卒業生など)からの寄贈資料、学習院の学生活動組織である輔仁会が収集した資料(史学部発掘資料)などをもって構成されている。そのひとつひとつが、戦前の学習院の特徴を示す貴重なものである。この資料群の一部は現在、史料館に収蔵されている。目録は『学習院大学史料館所蔵史料目録 第14号』として1998年(平成10)に刊行しているが、その中で南洋関係のものは11件40点である。今回はそのなかの10点を展示了。



■パラオ諸島円形木皿(当館収蔵)



■パラオ諸島楕円形木皿(当館収蔵)

VI 高松宮殿下からの資料

1923年(大正12)関東大震災により歴史地理標本室は焼失し、収蔵資料は灰燼に帰した。急遽資料を整備するために学習院は東京帝室博物館より資料を借用し、また各方面から寄贈も受けた。

高松宮殿下は同年10月20日に「本院焼跡ヲ巡視セラレ尚御同級学生ニ拝謁ヲ賜ヒ」(『庶務課日記』)、その後、10月24日に84件の資料下賜を宮家から申し出されている。そのうち45件が写真・絵葉書帖である。各地に行啓の折に収集されたものと思われる。

高松宮殿下は1905年(明治38)に大正天皇の第三皇子として誕生され、1911年学習院初等科に入学。1920年(大正9)中等科を3学年修了で退学、海軍兵学校予科に進まれた。

1925年海軍少尉に任官された後、軍艦に乗船し遠洋航海演習に参加された。ちなみに南洋方面では1928年(昭和3)と1933年に2回演習を行っている。『高松宮日記』の1933年条には「7月21日南洋庁から先年と同じような品をくれた」「7月26日パラオ島の北端のコンレイ村へ上がる」などの記事がみえる。今回展示している民族資料(アパイ、槍)も、南洋庁から高松宮殿下へ献上後下賜されたものである。



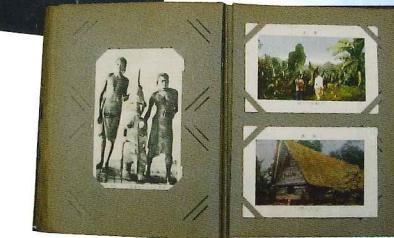
■高松宮宣仁親王殿下
(『皇太子殿下御卒業奉祝記念写真帖』
大正3年)



■マーシャル諸島武器。
パラオ諸島武器及び漁撈具(当館収蔵)



■マーシャル諸島武器。
パラオ諸島武器及び漁撈具の箱(当館収蔵)
「献上品在り(貳個之内二) 東京市芝区西台町一
高松宮邸 石川別當心得殿行キ 南洋庁ヤルート支庁出シ」
(箱ウワ書墨書)



■高松宮殿下寄贈絵葉書帖(沖縄・南洋)
(当館収蔵)



■日比谷公園にあるヤップ島石賓
(箱ウワ書墨書)

